「平成30年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	小野町立小野中学校，小野新町小学校
推進協力校名	小野町立飯豊小学校，浮金小学校，夏井第一小学校

未来を担う子どもたちに確かな学力を身につけさせるために
～「授業スタンダード」を活用した授業改善・指導力向上への取組～

1　パイロット校の取組内容

小野中学校（パイロット校Ⅰ）

（1）数学科におけるタテ持ち・習熟度別学習について

○平成３０年度：数学科「タテ持ち」＋習熟度別授業
・時間割と担当者割り振り例

	月	火	水	木	金
1	１年	３年	２年	１年	２年
2	２年	１年	３年	３年	
3					
4					
5	３年	教科	教科	教科	１年
6	総合	総合		道徳	学活

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
１学年 (4h)	A	B	C	
２学年 (3h)	C	A	B	<特支> C
３学年 (4h)	B	C	D	A

※　A：推進教師（１１ｈ）　B：（１１ｈ）　C：（１１ｈ）＋特別支援学級（３ｈ）
D：（技術８ｈ）＋３学年（４ｈ）

○　習熟度別学習として、発展（A）・基本（B）・補充（C）各コースに分けてクラス編成を行った。
○　数学科では，全学年においてタテ持ち・習熟度別学習を実施した。
○　各学年の教科部会を週に１回時間割に位置付け，教師の学び合いを行った。

（2）「授業スタンダード」の活用について
①　すぐに見られる，使える環境づくり
○　いつでも，すぐに見られるように職員室の壁に拡大版を掲示した。
○　週案にリーフレットを挟み，毎週「チェックシート」による反省を綴じ込んだ。
②　互見授業の励行について
○　「授業前に」→単元をつくることでねらいや指導事項などを明確にすることを目的として単元構想表（国語科），単元指導計画（数学科）を作成した。
○　「授業中に」→略案に「授業スタンダード」の視点を取り入れ，授業を行った。
○　「授業後に」→授業後の板書を写真で記録し，授業の振り返りに活用した。

（3）推進教師の役割と具体的な取組
①　「研修だより」の発行
○　「研修だより」の発行を通して，各種セミナーの伝達講習だけでなく，本校が取り組んでいく研究の方向性や捉え方などの話題提供に努めながら，共通理解を図った。
②　先進校の視察
○ 福井県では当たり前の「タテ持ち授業」がなされていた。
○ 秋田県では１１年前から行っている「探究型授業」であった。
③　推進地域協議会や町学力向上推進事業との連携
○　「研修だより」で推進地域協議会（年５回）の報告をし，共通理解を図った。
○　小・中交流授業研究会への計画的な参加を推進した。
④　学習コーナーの充実
○　各教科で展示されている作品管理を計画的に行った。
○　掲示物や学習プリント等の整理整頓に努めた。

小野新町小学校（パイロット校Ⅱ）

（1）研究計画及び指導案への「授業スタンダード」を基にした視点の位置付けと実践
①　教材の価値，児童の実態，単元の目標を考えた単元構想

○　単元を見通した計画を構想することで，本時における課題を明確にし，単元同士のつながりを意識した授業を展開する。

②　導入・展開・展開２・終末の４段階設定（以下，視点設定の例）

展開２**【ペアや学級全体での話合い活動を通して，自分の思いや考えを広げ，深められるようにする】**

- 自力解決の際に見取った座席表を活用し，意図的に指名するようにする。
- 考えの続きを発表させたり，同じ説明をもう一度させたりするなどして，児童の考えを引き出し，つなげることができるようにコーディネートしていく。
- 吹き出しなどを使って，児童が発言した思考過程を可視化できるように板書の工夫をする。

③「学習形態の工夫」と教師のコーディネート

○　話合いを通して，思考の整理や新たな気付きが生まれるように，ペア・グループ，青ペンタイム（※）などを意図的に設定した。

（※）児童同士で自由に考えや意見を交流させ，他の人のよい意見や気付いたことを青ペンでノートに書き入れる時間

○　「問い返し」や思考を「共有させるための教師の働きかけ」を意識した発問や意図的指名を行うことで「深い学び」を目指した。

④「授業スタンダード」チェックシートの活用

○　毎月末にチェックシートを使って反省をし，成果や課題を明確にしながら翌月の目標を立てて指導に取り組んだ。

（２）教科担任制の取組

①４学年における教科担任制

	４年１組	４年２組
Ｔ１	推進教師	
Ｔ２	１組担任	２組担任

○　４学年では，推進教師がＴ１，学級担任がＴ２として算数科の指導に当たった。

【ＴＴ体制による教科担任制】

②６学年における教科担任制

	６年１組	６年２組
体育科	１組担任	
社会科	２組担任	

○　６学年では，１組担任が体育科，２組担任が社会科の指導に当たった。

（３）推進教師の役割と取組

○　「学びのスタンダード」推進事業にかかる連絡調整事務を行った。

○　校内研修にかかる一切，授業づくりの推進，互見授業の推進に努めた。

○　４学年における教科担任制を行った。

○　研修会・公開授業の伝達と自校化を図った。

○　研修だより「学ぶんじゃー」を発行した。

（４）互見授業の取組

○　授業者は観察してほしいポイントを略案に記入し，参観者はそのポイントを参観し，付箋を使って授業者に渡すことで事後研究会は行わない互見授業を行った。

○　算数科において，１人２回以上行うことで授業や児童の変容を見るようにした。

【互見授業の様子】

２　推進協力校の取組内容

（１）飯豊小学校の取組について

①　活用計画

○　児童の「学ぶ意欲を育てる」ことをねらいとした「わかる・できる授業づくり」に向けた授業改善と指導力の向上を目指す。

○　児童が主体的に問いに向き合う場，児童の考えを大切にした学びの場を設定する。

②　活用の実際（第２学年算数科「水のかさのたんい」）

○　児童が主体的に問いに向き合う場を設定した。

・　「わかる。わかる。あれ？」という導入で，課題との差異を感じられるようにする。

○　つぶやきや児童の考えを大切にした学びの場を設定した。

・　友だちと学び合うために，友だちのよさや考えを可視化し，それをモデルとして，主体的な学習活動が進められるようにした。

○　「わかる」から「できる」への学びの連鎖を工夫する。

・　本時で学習したことを適用問題で確認することを通し，「わかった」と児童が達成感を持ち，次の学習で活用できるように、「できる」と感じられるような単元構成や自己評価の工夫を行った。

【かさを比べ合う児童の様子】

（２）浮金小学校の取組について

①　活用計画

○　「授業スタンダード」の中から共同で授業研究するための７視点を決め，授業改善を目指す。

○　推進校の研究会について，自校研究の視点での報告と協議を実施する。

②　活用の実際

○　板書と事後研究会記録を撮影印刷したものを資料として用いながら協議をした。自校の研究の視点で参観者が感じたことを報告し，それに関して協議した。話し合った内容は，黒板にまとめ，可視化し，協議を深めた。

【事後研究会記録】

（３）夏井第一小学校の取組について

①　活用計画

○　児童から「問い」や「思い・願い」を引き出すための魅力あふれる教材提示の工夫をする。

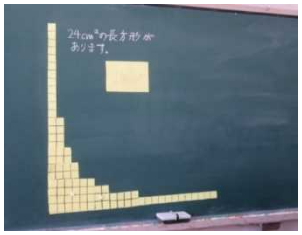
○　課題を追究・解決するための子ども同士が話を聞き合う活動の工夫をする。

○　新たな学びにつなげるための振り返り活動の計画的な位置付けの工夫をする。

②　活用の実際（第６学年算数科「比例をくわしく調べよう」）

【表から考える児童の様子】

面積が２４㎠の長方形の縦と横の長さを考えさせ，その関係について問うことにより，「確かめたい」という思いを引き出した。模型を用いたことで視覚的に課題を捉えることができ，また，図から読み取った縦と横の関係に着目させることができ，課題意識を持たせることができた。また，ちがう決まりがあるのではと児童自身が探究することのよさを実感できるように授業を進めた。教材提示の仕方の工夫により，児童の学習意欲を引き出し，主体的な学びが実現した。



【視覚的効果を狙った模型】

３　成果と次年度へ向けて

（１）成果

○　「授業スタンダード」を基盤とした授業づくりの研究を，共通理解を図りながら進めることができた。また，「チェックシート」を活用し，自分の授業の振り返りを定期的に行い，授業改善に生かすことができた。

○　互見授業参観や他校視察などの機会を多く取り入れることができた。

○　課題意識を高める導入の在り方や効果的な学習形態の工夫，教材教具の活用の仕方など，視点を明らかにして研究を深めることができた。

○　教科担任制の取組では，得意分野，専門性を生かした指導を行うことができ，より質の高い授業を行うことができた。また，生徒指導面でも成果が見られた。

○　数学科部会で共通理解を図りながらタテ持ち・習熟度別学習を行ったことにより，各学年担当が単元の系統をしっかりと把握して学習指導を進めることができた。

（２）課題

●　「わかる」から「できる」といった連続した学びについては，１時間の中で「できる」までにつなげることはなかなか難しい。振り返りや単元のまとめの時間などの設定の工夫が必要である。

●　児童の実態を踏まえた効果的な「話合い」のための手立てや「見取り」の工夫については課題が見られた。次年度も継続して実践研究していきたい。

研　修　だ　よ　り

小野町立小野中学校
平成３０年度 研修だより №14
平成３１年　１月２５日（金）
発行文責：　箭内広光

合　言　葉
「みんなで知恵を出し合い、みんなで取り組む研修」

１　第８回現職教育全体会について

先日の現職教育全体会では、「今年度の反省」と「次年度に向けて」について共通理解を図りました。今回の研修だよりでは、『今年度を振り返って、学びのスタンダードにおいて、「意識したこと」や「力を入れて行ったこと」などについて記述していただいたこと』を紹介します。

（ちなみに私は、技能教科の参観が大変勉強になりました。それは、「どの生徒にも活動の場が確保されている」ということです。ぜひ、数学科で意識して行っていきたいと思いました。）

○数学科では、そのコースの実態に合った授業をもっともっと工夫する必要がある。
生徒の教師も「やるべきことはしっかりやる」ということが大切であり、基本になるのではないか。

○自分の授業の質的向上のために、週１回のチェックシートに記入することで、行った授業を振り返り、次につなげる活動を行った。また、学習指導要領における教科の目標や育てたい資質・能力を頭に入れながら単元計画や授業構想を行うことを意識した。

○ノートを使って自分で学習が進められるような使い方や活用の仕方の指導。生徒と生徒、生徒と教師をつなげる発問やつなぎの言葉。授業の雰囲気作りやルール・学習習慣。

○「主体的な学び」を継続して実践できるよう、「予習の時間」を授業の初めまたは終わりに取り入れた。全員が基本的な内容をある程度理解してから資料の読み取りや話し合い活動を行わせた。

○自分で授業スタンダードの重点事項を絞って週の中で実践・検証を行うようにした。特に、「本時のねらい」は、１週間の取り組みを反省するたびに改善を図ることができた。生徒のゴールをイメージできるようになってきた。

○３～４人のグループで「考える」場面を意図的に設定するとともに、様々な意見が出るように発問を工夫することにより、より深い学びや読み取りにつなげることができた。

○学び合いや教え合いの場を増やし、「みんなでわかる」を大切にした。

○タテ持ち授業を行うにあたり、生徒が何を学びたいか、何を学ぶ必要があるかを意識しながら教材研究にあたった。コースによって求められているものを見極められるように心がけた。

○課題について特に意識した。生徒が単元の見通しを持ち、必要感を感じながら主体的に取り組める課題となるように考えてきた。また、話し合い活動をただ行うのではなく、教師がコーディネートして「何のために」話し合うのかを意識して授業に取り組んだ。

○学び合いの場の設定。考えを確かめる・深める場の設定。個別指導や働きかけ。

○主体的・対話的に取り組むことができるよう、授業全体で意識することを心がけた。

○「教材との出合い」を意識して授業を行ってきた。独自の教材開発を心がけ、新しい素材や技法を取り入れて体験を重ねながら作品制作を行ってきた。

○学びの連続性を意識した授業を展開し、自己の変容を実感させることを意識したことで、４月と１２月のアンケート結果が変わった。（４月：その教科が好き「５割」→１２月：その教科が好き「９割」）

○授業研究会への参加や授業研究を行うことで自分の授業力向上に努めることができた。また、授業のコーディネートの仕方や様々な教材との出合いを意識することができた。さらに、タテ持ち授業による教師間の話し合いは、お互いを高め合えることにつながった。

○生徒の見取りを（授業を進めながら、どこを（どの生徒を）見ればよいか）について意識して行った。

○小野中のスタンダード作り。新聞・図書・道徳など。

○指導案作成の際、P7の「チェックシート」の項目を意識しながら行った。

ありがとうございました。

研　修　だ　よ　り

小野町立小野中学校
平成３０年度 研修だより No.15
平成３１年　２月　１日（金）
発行文責：　箭内広光

合　言　葉
「みんなで知恵を出し合い、みんなで取り組む研修」

1　第８回現職教育全体会について

先日の現職教育全体会では、「今年度の反省」と「次年度に向けて」について共通理解を図りました。今回の研修だよりでは、『学びのスタンダード３年目（最終年度）に向けて「考えていること」や「要望」や「意気込み」などについて記述していただいたこと』を紹介します。

○着実に学力を向上させていくには、生徒も教師も方向性を同じくして、可能な限り時間をかけていくしかない。生徒の家庭学習時間などを月ごとまたは第１週とか決めて、データを収集し、分析していくことが大切。

○自分自身の授業力向上のため、日々の授業の中で授業スタンダードを活用した授業を展開していきたい。特に、「共有するための働きかけ」や「考えを深めるための問い返し」は意識することで、常に実践することができると考えている。生徒の学力向上につなげることを心がけていきたい。

○自己マネジメント能力の高い生徒の育成をしていきたい。

○大型TVやホワイトボードなどのハード面を充実させる。

○まとめの時間の工夫。そのための時間配分や計画の立て方などを考えていきたい。

○今年度の研究授業を通して、その単元をさらに深め、新要領にふさわしい授業・教材づくりをすることができた。次年度も、学力向上できる授業実践・研修・研究を積極的に行いたい。

○本日提案された「授業の基盤づくり」（望ましい人間関係・教師の姿勢・学習規律）を大切にしていこうとする考えに大いに賛成です。

○問いや学ぶ意欲が持てる課題の設定や指導過程の工夫。表現力の向上。

○意欲を引き出すことができるような教材・教具の研究に力を入れ、学力向上に役立てるようにしたい。

○今年度、実践してきたことを継続していく、さらに、改善していくことはもちろんですが、教科間や家庭学習など自分の教科だけで完結せずに様々な時間で連携を行っていきたいと思います。学力向上を図るために、何をするかを考えて実践していきたいです。
（互見授業は是非継続をお願いいたします。もし可能ならば、校長先生や教頭先生の授業も見てみたい。）

○「対話的な主体的な学び」の実践。ペアやグループ、全体での話し合い。話し合いが成り立つ集団作り。

○生徒の「学びたい」「できるようになりたい」という気持ちを大切にし、学力向上につなげていきたい。

○試行錯誤を繰り返して授業を行っているため、生徒が計画や見通しを持てないこともままあり、反省している。

○計画・方向づけ・見通しを強化する。

○数学以外のタテ持ち。

○教師の指導力向上につなげるための研修会。

○互見授業を普段から行う。

○月ごとに小野中として意識する視点（４月は板書など）を設定するのも面白い。（該当ページをコピーして配るなど）まずは、個人で少しずつ設定していきたい。

○生徒の良さを生かすために何をすべきかを考えるべきかと思います。小野町のスタンダードを発信する年度だと思います。

○（感想ですが）先生方の授業「間の取り方」「発問」「資料の提示方法」など、大変勉強になりました。来年は、もっと積極的に参観し、学んでいきたいと思います。

ありがとうございました。

学ぶんジャー

発行日：2018 年 5 月
小野新町小学校現職だより
文責：矢吹　聡

互見授業について

日々の授業改善、教師一人一人の授業力の向上のためには、授業研究を数多く行うことが有効です。しかし、授業研究会を数多く行うとなると、授業者としてはそのための準備に負担がかかりますし、参観者としてもそのたびに自分の学級を自習にするわけにもいきません。また、授業研究会の後の事後研究会の時間を確保するのも難しいのが現状です。

そこで、授業者と参観者の負担を軽減し、日常的に取り組むことができる授業研究の工夫として「互見授業」があります。

「授業スタンダード」の中にも「日常での教員の学び合い」ということでこの「互見授業」をすることで日々の研修を充実していってほしいという願いが込められています。

「互見授業」は、1 単位時間の中で、「導入の課題把握の段階を見てほしい」「展開部分の教師の発問と児童の反応を見てほしい」「自分のコーディネートのしかたを見てほしい」など、ポイントを絞って行う授業研究です。原則としては以下の 3 つを原則とします。

- ○　１０～１５分で行う授業観察とする。
- ○　参観は自由だが、チームで研究を推進する場合には、できる限り参加することが望ましい。(新小ならブロックをチームとして考える)
- ○　付箋紙を活用して意見を交換する。事後研究会は行わない。

授業者は、指導略案に、次の 3 点をごく簡潔に記入し、参観者へ事前配布します。

- ○　単元名および本時の目標
- ○　展開略案（主な学習活動）
- ○　観察の視点（授業改善の視点）

参観者は、授業改善の視点に沿って授業を観察し、気づきやコメントを付箋紙に記入して授業者へ渡します。授業者は、集まった付箋紙を基に授業を振り返ります。特に事後研究会は行いませんが、必要な場合は個別に対応をするようにしましょう。

日常的に授業を見せ合うことによって互いの授業改善を図るために行います。そのためにあまり構えすぎないで気軽に行うことが大切です。授業の考え方や悩みを共有し合ったり、相談し合ったりし合えるような職場にしていきましょう！

単元名　　比べ方を考えよう

本時の目標　面積、人数が異なる場合の混み具合の比べ方を理解する。（２／１８）

○月◎日（月）　５年１組　○○　○○

〈本時の展開・授業改善の方策〉　　〈反省・考察〉　※付箋の添付

1　本時の課題をつかむ

め　どのバンガローがこんでいるのだろう。

2　解決の見通しをもつ。

3　自力解決をする。

〈ポイント観察　9：25～9：40〉

観察の視点　展開２

○　視点を明確にした練り上げの工夫

・一人の考えをみんなに広げさせるための支援

・数理の良さを生かした考え方からより良い考えを見つけさせるための発問の工夫

4　結果とその理由について話し合う。

（1）それぞれの考えを話し合う。

○　１㎡あたりの人数で求めた児童

○　１人当たりの面積で求めた児童

○　公倍数で求めた児童

（2）速く・正確に・いつでもの視点から、考えの良さに気付く。

（3）単位量で求める方法を考える。

5　混み具合の比べ方を整理する。

6　適用問題を解決する。

7　本時のまとめをする。

良かった点

課題

改善策

学ぶんジャー

発行日：2019 年 1 月
小野新町小学校現職だより
文責：矢吹　聡

対話的で深い学びの創造

１月１８日に学習院大学特任教授・東京大学名誉教授、佐藤学先生の講演を聞いてきました。講演会において、先生方にも知っておいてほしいということをまとめましたので、ぜひ参考にしていただければと思います。

1　専門家としての教師

授業研究では、「良い」「悪い」で見ない。良し悪しで評価してしまうと学ぶことができない。どこで「学び」があったのか、どこに「学ぶチャンスがあったのか」という事実から学ぶ姿勢を持つことが専門家としての教師の姿である。また、子どもの身になって授業を見る、教師の身になって授業を見ることが大切である。なぜなら、大切なことは目に見えないからだ。みんなで様々な視点から授業を見ることでそれを発見し、共有し合うのが授業研究の意義である。そのため、教師は一人では成長できない。先輩と仲間が必要である。

授業を参観すると、どうしても教育技術の良し悪しの話になりがちですが、こういった視点で話合いをすることが大事だそうです。ぜひ、次年度の授業研究・互見授業の際の視点にしたいところです。

2　「探求」と「協同」・・・切っても離せないもの、一人ではできないもの

①一人残らず学びの主人公に、質の高い学びの創造＝個人作業の協同化。協同的な研究・ケアの共同体。一人一人が主人公になるような配慮を。

②「共有の学び」と「ジャンプの学び」

③低学年の授業＝「ペア学習」＋「全体の学び」

・グループ学習は発達段階的に無理。「一人で考えなさい」も難しい。なぜなら、１年生は内言（思考の言語）がまだできていない。外言（対話）を学んでから内言を学ぶのでペアがよい。子どもらしい頑張りをほめても伸びない。大人になろうとしているところをほめる。

④３年生以上は男女混合４人グループによる探求中心の授業

⑤真正の学びによる質の高い学びの創造

・その教科の本質にあった学びをしなければならない。

（例）社会科は資料（データ）から学ぶ。

①は一人一人が学びに向かう姿勢が大切で、教師はその場を確保してあげなければならない。話合いでは分からないところを「聞く」ことができる環境づくりが大切であるそうです。②では、教科書レベルは問題が簡単すぎるので、前半２０分程度で終わらせ、後半はどの子も夢中になれるようなジャンプ（発展的）の学びをするような授業がこれから求められるそうです。③、④はぜひ次年度に向けて考えていきたいところです。⑤はまさに

新しい指導要領にある「見方・考え方」を考えた授業づくりが大切なことが分かります。

3　アクティブラーニングの落とし穴

×　話し合いにしない。分かったことを交流し合っているから学びではない。自分で分かっていることは話し合う必要がない。あくまでも「聴き合い」である。

×　教え合いにしない。「教えてあげてね」はダメ。できない子の世話ばかりさせられたら嫌になる。できない子が「待つ」子に育つ。できない子は自分から聞けるようにする。

×　意見の発表会にしない。

今年度中心として取り組んだ学び合いですが、ペア学習やグループ学習で行ってしまっていることもあるかと思います。今一度、何のためにペアやグループで話し合うのか、必要性と目的意識をはっきりと教師側が持って話合いをさせていきましょう。

学先生によれば、コの字型が授業の形態として一番良いそうです。特に低学年では、隣の児童と近ければ近いほど安心感が生まれ、話合いがしやすいといいます。しかし、ただこの形にしても効果はないことは言うまでもありません。あくまでも児童同士が相手の考え意見を「聴き合う」ことができてこそ効果があるそうです。「聴き合う」関係づくり、どのようにすれば育っていくのか考えていきたいところです。

4　学び合う場と関係と環境を作る。

・場・・・コの字型がよい。お互いに顔が見える安心感。つながりが生まれる。

・教師のポジショニング・・・「つなぐ」(「どこからそう思ったの？」)

×「ほかに意見は」などの発問。

・関係・・・「聴き合う」関係。

・環境・・・静けさ（安心して学びに専念できる）

・良い教師は「口」で仕事をしない。「耳」と「目」で仕事をしている。

→話すだけでなく、児童のつぶやき、表情をよく見る。

最後に、２年生のひき算の共有とジャンプの問題の例です。上位も下位も分からない問題だからこそ、話し合う必要感が生まれ、分からないからこそ、下位児童も聞きやすくなるのではないでしょうか。

【共有】３１－１３のように二つの数の反対の数をひき、でた差の数をさらに引いていき、一桁になるまで計算するという課題です。

・３１－１３＝１８　８１－１８＝６３　６３－３６＝２７　７２－２７＝４５　５４－４５＝９

・４１－１４＝２７　７２－２７＝４５　５４－４５＝９

・７２－２７＝４５　５４－４５＝９

・９２－２９＝６３　６３－３６＝２７　７２－２７＝４５　５４－４５＝９

【ジャンプ】この計算でかくれたきまりを３つ答えましょう。